

## シンポジウム「子ども支援のための組織づくり」 平成19年度現職教職員研修講座「臨床心理・養護教諭」研修講座より

青木 真理\*

平成19年度の現職教職員研修講座の中の「臨床心理」研修講座と「養護教諭」研修講座の合同開催で行われたシンポジウムの模様の記録である。

### 1. はじめに

本シンポジウムは、本センター現職研修部門が企画運営した19年度の現職教職員研修講座の中の「臨床心理」研修講座と「養護教諭」研修講座の合同開催により、平成19年7月25日、「子ども支援のための組織づくり」と題して行われた。本稿は録音の逐語録原稿をもとに、シンポジストそれぞれが加筆修正したもので、それぞれの発言の文責は発言者個人にある。なお、発言中のキーワードをゴシック体で示した。

シンポジストは以下の通りである。

#### 話題提供

大森俊輔（総合教育研究センター客員准教授）

佐藤江里子（郡山市立大槻中学校教諭）

高橋美代子（福島県立川俣高等学校養護教諭）

金成美恵（福島県中学校スクールカウンセラー）

指定討論 佐藤 理（福島大学人間発達文化学類教授）

司会 青木真理（福島大学総合教育研究センター教育相談部門准教授）

企画 青木真理、佐藤 理

（この項、文責 青木真理）

### 2. シンポジウム

青木：この時間は「子ども支援のための組織づくり」題するシンポジウムを行います。司会を務める青木です。シンポジストを紹介します(略)。それでは大森先生からお話いただきます。

大森：退職をして3年目になります。その前は小学校の校長をしていました。校長としての経験をふまえてお話をさせていただきます。小学校も中学校も高校も、校長も教頭も養護の先生も担任の先生方にも共通すること、共通している願ってなんなのかなと考えるってみました。そうすると、ごくごく当たり前のことで、ごくごく簡単なことで、それがとても難しいことだということに改めて気がつかされました。それはどの子どもも、つまり特別支援を得なければならぬお子さん、学校に行きたくないなというお子さん、生徒指導上問題のあるお子さん、生活面で問題があるお子さん、帰国子女で、日本での勉強1回もやったことないよ、日本語もよくわからないよ、そういうお子さんも、ど

の子も元気で明るく楽しく学校生活を送ってほしいというのが、子どもさんの教育に携わるみんなの願いでないのかな。いわき市総合教育センターに「すこやか教育相談」という相談機関があります。そこでは子どもさん自身の悩みやお父さん、お母さん、じいちゃん、ばあちゃん等の悩みについて電話や実際の面接で相談に乗るというお仕事をさせていただいておりました。この2年間の経験と、学校での経験と合せて「そうだよね。なるほどなあ」と思ったことがあります。それは「先生がほくを見てくれるんだ。見守ってくれているんだ。僕の話に耳を傾けてくれるんだ」という気持ちでいる時子どもたちは安心して楽しい学校生活を過ごすことができる。あるいは保護者の方が「先生は、あるいは学校は、私の子どものこと本当によく見てくれるよね。そして話を聞いてくれるんだわ。私らの話も聞いてくれるよ」、そういう考えになっている時に、子どもを安心して学校に送り出すことができる。当たり前なことなんですけど、これがなかなか難しい。それらを合せてみますと、子どもたちや保護者の方が、子どもたちにとっては**存在感**、**安心感**、**信頼感**とかを持つことができるようにするためには、**見ていてくれる**、**見守ってくれている**、**お話を聞いてくれている**というようなことが大切になってくる。

では学校の先生方がみんなそういう気持ちになるようにするためにどうしていったらいいのか。つまり、子ども支援のための組織作り。子どもさんからも親御さんからも信頼される、あるいは楽しいと言える学校にするためには、その数多くの先生方に、その子ども・保護者への対応の仕方とか、指導の仕方とかに関して**一貫性**が必要だと思うのです。養護の先生にお話したらよく聞いてくれたんだけど、担任の先生に言ったら、全然聞いてくれないんだ。それで校長先生に話したら校長先生は「担任に任せてあるから担任によく相談してね」。こんなことでは信頼感を得ることはできませんし、子どもたちも安心して学校生活を送ることはできません。つまり、そういう組織を作るためには**一貫性**がなければだめだというのが一つ。二つ目はこれが**継続**してずっとつながっていかなければならない。あと一つは**日常性**。毎日毎日の子どもの生活の中

\*：福島大学総合教育研究センター

でそういったものが出てこなければ、「学校って楽しいな、来て良かったな」と思えるようにはなかなかならないのではないか、そのように考えるのです。

次には先生方の共通理解を図り、共通実践をするためにどうしていったらいいのかということ。課題がいっぱい出てきますね。

一つは、**情報の共有**ということ。情報の共有も横と縦の両方なきやだめなんでないのかな。すこやか教育相談をしている時に、「担任の先生は聞いてくれるんだけど、校長先生は全然わかってくれないんだ」という訴えがあった。これは縦の情報の共有がされていないということになるでしょうね。あるいは「担任の先生はよく分かってくれる先生なんだけれども、担任の先生が出張でいなくて、別の先生来たんだけど、その先生は子どものことを叱ってばかりで全然言うこと聞いてくれないんだ」。これは、横の情報の共有ができないってということになるわけです。ですから、**情報の共有は縦と横**。

二番目は、養護の先生を見ていると本当に大変だと思いますね。いろんな子どもさんが保健室に行きます。学校全体の保健の指導もしなければなりません。そうすると、たった一人きりしかいない養護の先生の負担過剰にならないようにしたいと思うのです。あるいは生徒指導の担当の先生一人のみに負担がかかる事のないように、あるいは特別支援学級担任の先生に、あるいは指導に悩むお子さんをお持ちの担任の先生に、そういう先生方の**負担過剰にならないようにしたい**。これが、二番目です。

それから先程の一貫性、継続性、日常性を実現するためには、**子ども理解のための研修**をどこでどのようにするか、ということ。ちょうどそんなことを考えている時に、平成16年の4月から学校に**特別支援教育推進のための校内委員会**を設けなさい、そのためのコーディネーターを置きなさいと通知が参りました。それをみると情報の共有とか、負担過剰にならないようにとか、子どもひとりひとりのための、とかがあり、「あ、これは上手く活かすことできるな」と思ったわけです。そこでコーディネーターを誰にしたらいいだろう。私のいた学校には特別支援学級が4クラスありました。その中のお一人の先生が、特別支援教育に大変熱心で、しかも実践家であるということで、みんな迷ったかと思うんですが、私は全然迷わないで彼にお願いしました。そして校内委員会を作りました。先程、情報の共有とお話しましたが、この校内委員会では実状を話し合ったり、情報交換をしたり、子どもの変容についてお互い報告し合ったり、実際に指導する時の役割分担を決めたりしました。また、子ども理解のための研修という意味では、コーディネーターを中心に、基礎的な知識、対応の仕方等の勉強をし、現職教育部と連携をとりながら問題をお持ちのお子さんのクラス

の授業研究をして、それをみんなで見る。これは私には強く印象が残っていて、時間があれば後でお話させていただきたいと思います。それから、コーディネーターを中心として、特別支援を要するお子さんに対する指導計画や担当に当たった人の指導記録、そういったものにコーディネーターがアドバイスをしたり、相談にのったりして、校内委員会の運営に携わってもらうことができました。

この時大きな役割を果たしてくれたのが養護の先生なんです。管理職である私が掴みきれないお子さんの細かい状況や、「一週間前はこうだったんだけど、校長先生、今度はこうなっちゃったんだわ」「父ちゃんとなんだかケンカばかりしてるみたいだよ」というような家庭の状況とか、子どもたちのそういうちょっとしたことが子どもたちの指導にとって非常に大切だということを養護の先生に教えていただきました。朝、全校生の健康観察表を持ってきてくれて「この子、少しこの頃休みがちになってるんだ」などご報告いただきました。それをコーディネーターと連携を取りながらやってくれたものですから、校内委員会っていうのができて、本当によかったと思っています。

まとめに入りますが、いろいろなことを進めていく場合にもとになるのは、**一人一人の先生方が子どもをどう見るか**、ここに尽きてくるのかなと思うようになりました。同じ子どものある行動を見て、「どうして、そういう自分勝手なことやってるの。だからあんたはだめなんだ」と捉える先生もいれば、「一昨日あたりから様子おかしいから。そこをよく考えればああいう行動が出てくるわけが分かってくるかもしれない」と捉える先生もいる。ある先生が「本当にあの子はおっちょこちょいで、いたずらして、トラブルばかり起こして」って言うと、「何言ってるの、元気で何よりだ。いろいろやってるのは、本当は元気で活発な子どもですよってみんなに宣伝してるようなもんだよ」と捉える先生もいる。同じことがあったとしても、その見つめる先生ご自身の心の有り様によって、子どもの捉え方が変わってくる。こわいなと思いました。そうなりますと、子どもをどう見るか、子どもってどういう存在なのか、そういったことを先生方が**職員室の中で気楽に気軽に話せるような職員室作り**ができればいいな、そんなことを考えながら校長という仕事をしてきました。みんなで子どもたちのちっちゃな伸びを共に喜ぶことができるような教師集団をめざし、先生方がそれに向かって努力してくれたこと、それが私にとっては非常に嬉しいことでした。その時に、養護の先生の温かい心配りとか情報提供、子どもへの対応、それらが担任に移り他の先生にも広がっていきました。時間になりましたので、これで終わりにしたいと思います。ありがとうございます。

青木: 続いて佐藤江里子先生にお話していただきます。

佐藤江: 郡山にあります大槻中学校の佐藤と申します。大槻中には今年度赴任し、特別支援学級担任をしています。これから話す事は、前任校での実践です。私も教職30年近くになりました。学級担任・副担任も経験しておりますが、校務分掌では、生徒指導係や学年主任だった時が多く、生徒指導主事も任されたときもあります。その時の体験や実践からのお話です。

先生方の学校で生徒指導主事をなさっていらっしゃる先生はどんな先生でしょうか？（笑）校務分掌は、一応希望を取るものなかなか希望通りにいかないのですが、生徒指導主事は、教員から希望するというよりも校長先生が見込んだ人、すぐに動いてくれる人、指導力のある人、子どもにもものが言える人（お説教ができる人）、そういうイメージがあるのではないのでしょうか？私も保体の教員ですので、子どもに近い存在と見られたのでしょうか、声がかかりました。その後、生徒指導・教育相談、また特別支援教育コーディネーターなど任され今に至っています。

子どもたちの問題行動はひと昔前に比べると確かに変わってきています。私が、生徒指導主事をやっていた10年くらいは、学校外で問題を起こす子が多くて警察とか関係機関の連携も頂きながら対応していたと思います。勤務時間外の出動とか、家庭訪問して保護者の方と話し合うことが多かったと記憶しています。最近はどうでしょうか？昨年、私は中学1年生の学年主任をしておりましたが、小学校段階で学級崩壊、学年崩壊までですんでいるような子どもたちが中学校に入ってまいります。そうすると中学校はそれこそ大変な状況に陥るわけです。最初は、中学校は小学校とは違うぞ！と、先生方が睨みをきかせてスタートしますが、しかし、時間の問題で子どもたちが成長しますからそうした態度だけでは対応できなくなります。さらには保護者の中には、学校のやり方に対して批判的な方がいるわけなのです。そのような中でやっていますので生徒指導も様変わりせざるをえないのです。

私が生徒指導主事をやっていた平成8、9年頃、文部省はスクールカウンセラーを公立の学校に配置しました。現在は郡山の中学校すべてにスクールカウンセラーが入っていますが、その頃は、俗にいう生徒指導困難校に先に配置されたように思います。その際校長先生から「スクールカウンセラーの先生を校内でどのように活用したら良いかを考えてほしい」と言われました。今考えますと、それは、教育相談係の仕事だったと思います。

私が、生徒指導係から教育相談の分野に入るきっかけとなったのは生徒指導主事として活動していた時力を貸してくださった保健の先生の影響がとても大きいのです。その頃の私は、情熱を持って子どもに接したらなんとかなるなどという考えで無我夢中でやってい

たのですが、その保健の先生は、私たちとは別の角度から子どもに接し、生徒理解の方法とか、子どもとの相談の仕方などよくご存じでした。その先生のところに行くと問題傾向を持つ生徒がちょっと良い方向に変わったりしていたんですね。最初は、「成績をつける先生ではないから生徒が集まるのだ」などと言う先生もいらしたんですが、とにかく生徒への接し方がお上手でした。たとえば、私と話をしている時に生徒が入ってくると、「先生、あとでまた。この子と約束していましたから」というように、子どもとの約束を大事にします。また、学校の中でのリーダー的な存在でもありました。先生方が日々の忙しさの中で問題を見落としそうなとき、保健室でキャッチした事を、（生徒との秘密は守って）なにげにアドバイスをまじえて話してくださったり、また生徒指導上問題の生徒や、不登校などの生徒を抱えて四苦八苦している教師に声をかけ保健室に呼んでくださり、ハーブの葉が浮いている紅茶を入れながらその先生の苦労話を聞いて下さる、そんな先生でした。ですから、この保健の先生のところへ生徒が行くと何となく変わる理由を先生方も感じ始めていたように思います。やがて校長先生から、この保健の先生が教育相談やカウンセリングについて勉強しているとお聞きしました。情熱とかやればできるという問題ではなく、教師自身が学ぶことが大事であるということを私はそこで気づき、教育相談分野に入っていくわけです。

現在まで5校の中学校に勤めましたが、教育相談部（係）は、ほとんどの場合、目立った活動もなく、校務分掌として一覧表にあるだけで、仕事の内容は家庭訪問や三者面談の実施案を出すだけです。不登校の生徒のためにケース会議を設定することはありません。子どもを取り巻く問題は学校の外にもありますが、教育相談部が、生徒指導部と手を取り合って積極的に動かないと今の厳しい状況を改善できないと強く感じていました。ですから先生方から相談が持ち込まれる教育相談部、そのとき力を貸してあげられ教育相談部にならなければならないと思いました。資料（図1）にも載せました“機能する教育相談部”がそれなのです。

その頃私は教育相談部長と特別支援教育コーディネーターを兼任していましたが、係同士が連携していない状況でした。機能する係となるためには係と係をつないでいく努力が必要でした。その時先ほどお話した保健の先生に相談しましたところ、先生は「言葉だけでやろう！やろう！と言っても先生方は力をかしてはくれない。まず、自分でやってみせないとだめ！自分の学年の中で問題生徒・不登校生徒への支援をやってみせて、自然とまわりから、『何？どんなふうになっているの？』と声がかかってきたらその時がチャンスだよ」とアドバイスをいただきました。先にお断りしておきますが、これは中規模校、生徒が600～700人、

教師の数が42～43人の学校で行った活動です。まず私は学年の中で一緒に動いてくれる仲間を作り、ついで校内へ教師のネットワークを広げていく努力をしました。また、ネットワークを作る傍らで、これから相談部がやろうとすることが今の学校の状況で可能なかを検討するために状況の把握を行いました。何より管理職である校長先生・教頭先生が不登校や不適応そして特別支援についてどのように考えているか、係にどんな事を係に期待しているかをお聞きし、同時に協力をお願いしました。

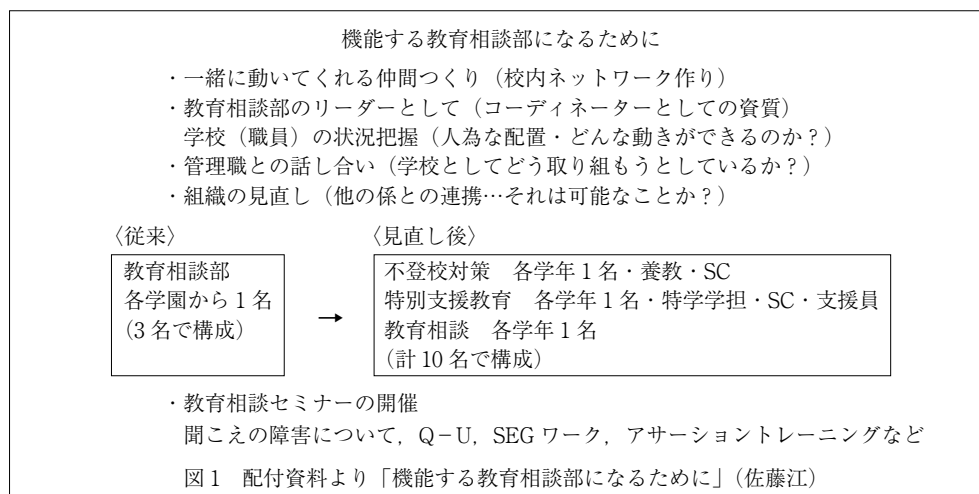
その後、**組織の見直し**を行いました。従来は生徒指導部の下に6つの係がありました。そのひとつに教育相談部があり、学年から1名ずつの3名で構成されていました。特別支援教育委員会・不登校対策委員会は別に設けられていました。これらの係や委員会をもっと機能させるために、生徒指導部から二つに枝分かれさせ、生徒指導部と教育相談部と大きな柱を2本立てました。そして、教育相談部を不登校担当・特別支援担当・教育相談担当と3部門にし、各係の仕事をわかりやすく先生方に提示し、学年から募りました。これも校内ネットワーク作りの一つの方法だったと思います。

活動において最初に一番力をいれたのは**教育相談セミナー**の開催です。中学校はほとんど毎日放課後に部活動がありますね。ですから部活の時間に研修など入れたら「中体連前なのに」と批難の嵐です(笑)。そこをなんとか、といってお願ひするわけなのです。校長先生にも、職員会議などで、「『とてもためになる研修ですから、みなさん参加してください!』と言ってください」などと前もってお願いしました。だいたいは定期テストの前の日に開催しました。テスト勉強期間中は部活動は禁止ですので。それでも、文句は出るので、「テスト問題作ってないのに…」と(爆笑)。それで「ごめんなさい!1時間か2時間だからつきあってください!」って始まったのが最初です。最初のセミナーは聴こえの障害の支援についてでした。難聴の

生徒がおりましたので、その生徒の聴こえの状況を先生方で体験し、また授業等での支援の仕方について研修しました。「講義形式や堅苦しい研修は好まない」という先生方の声がありましたので、小グループでの演習やワークショップの形で実施しました。一番先生方に好評でしたのは、Q-U学校生活満足度調査<sup>1)</sup>の演習でした。Q-Uは不登校・いじめの早期発見に役立ち、学級担任にとって学級経営をする上で良い資料を提供してくれる調査であることがわかり「次年度学校全体で実施しよう!」ということになりました。また、構成的グループエンカウンターやアサーショントレーニングなど実際に教師同士が体験しながら研修をすすめました。このセミナーを通してみんなで気づいたのですが、教師集団は日頃の忙しさに疲れていて、お互い話す時間も、和気あいあいと何かをやるという時間もないのです。いろいろなワークを通して「**ひさしぶりに笑ったよ**」と先生方自身が**楽しみ、自分がやって楽しいのだから学級の子どもたちにもいいにちがいないと実感**したようでした。事後アンケートに「楽しかった」と多く書いてあったことが企画・運営した教育相談部としても嬉しかったです。

生徒指導部とは次のような連携をしました。年に1～2回実施するいじめ・悩みの調査では、必ず大なり小なり何か出てきます。すると生徒指導部は当該生徒から聞き取りをし、場合によっては保護者を召喚して話をします。しかし**加害の生徒を指導**ただけでは**解決になりません**ので、教育相談部としては加害・被害生徒に対して、「すぐには出来ないかもしれないけれど、少しずつ行動を変えていこう。友達への接し方を考えてみよう」とSSTなどを使って支援しました。また、被害生徒については、心理的なケアが必要であると判断した時にスクールカウンセラーの応援を頂きました。

また、学年の生徒指導係と教育相談係が協力して**学年ケース会議**を実施しました。どのケースも問題が起ってから生徒指導、教育相談が動いたのではすでに



状況は厳しく、回復するのに時間もかかります。先ほどお話しした保健の先生から教えて頂いたことですが、「教育相談は発展的で開発的な指導である」ということを常に頭に置き、教育相談係は生徒指導係と連携し、係のリーダーとして、常にアンテナを高くして状況を正確につかみ、各先生方の力を引き出し、協力して活動できるように動きました。そして現在に至っています。

終わりに、やっぱり生徒にとっての学校は「楽しいところ、明日も学校へいききたいな」と感じられるところでなければならない。ですから、教師集団は生徒にそう思ってもらえるような活動を作り出し、その中で、子ども自身が学校生活の中で意味のあることができ、多くの仲間の一員としての所属感を感じながら心身ともに成長できれば、係としての役割が果たせるのではないかと思います。

**青木:** 続いて高校の養護教諭の立場からということで、高橋先生からお話をさせていただきます。

**高橋:** 私は、教職歴、32年で高校の養護教諭をやっています。今日は年代を追いながら、不登校の生徒を取り巻く学校環境の変遷、社会の変遷なども踏まえながら、連携をどう上手くとっていったらいいのかという視点で、32年間の実践の中からお話させていただきたいと思います。

私は1975年に採用され、その4年後、二校目で初めて不登校の生徒に出会いました。この時の保健室登校の体験、担任との連携のあり方が、養護教諭としての自分の原点となっています。レジュメに担任の役割、それから養護教諭の役割を図式で示しましたが(図2)、事例を少しかいつまんで話します。この生徒は自己臭症状をもつ生徒で、修学旅行を目前にして欠席が続きました。私はそれまで面識がありませんでしたが担任の先生から「ぜひ一緒に家庭訪問をしてもらいたい」と依頼され、生徒との関わりが始まりました。養護教諭としての見立てをし「病的な要素が強いので精神科受診が必要である」と担任に伝えました。保護者もそれを受け入れ医療のベースに乗りました。主治医との連絡調整を養護教諭が、保護者の連絡調整を担当がしました。その後本人が保健室登校を望み保健室登校の第一号となりました。1980年代初めの頃です。担任は保健室登校の間に、クラスの人間関係の調整をし、養護教諭は、本人との信頼関係をとりながら教室復帰へのタイミングを図りました。その後、数週間で教室へ復帰し、卒業し公務員になりました。担任とお互いの役割を果たしながらこんな風に連携していけば子どもたちが社会で自立できるのだと、非常に良い経験をさせていただきました。その後このケースをモデルに不登校生徒への関わりをしていくのですが、なかなかそう上手くはいきませんでした。

1980年代後半から、反社会的な問題行動を起こす生

徒、理由が不明確な長欠の生徒が増えてきました。当時、工業科の生徒には多くの長期欠席者がおりましたが、私たちには状況を知らされないまま年度末になって退学を知らされることが多くなりました。プロジェクトチームができたらかか養護教諭も関われるのに残念な思いを持ちながら次の高校に転勤しました。

1990年代、3校目の高校は工業科で、精神疾患がベースにある不登校が出てきた時期でした。自閉症の生徒がはじめられるということがありました。その生徒について担任は「問題のない生徒」という見方をしていました。と言うのは、彼は非常に成績が良かった生徒でしたから。その当時の学校では自閉症(アスペルガー)の理解はほとんどなされていませんでした。それに加えてこのケースは、いじめがあったということを担当には認識していただけなかったのです。この生徒には対人関係の難しさがあるのと、本人が自殺というところまで思いつめられていることから、私は専門医の受診を急いでいました。担任は「自分のクラスにいじめはない」という立場をとって、精神科受診を勧められたことで「この生徒自身の問題である」という捉え方をしました。自殺の危機回避だけはしなければ、スーパーバイザーの手を借りながら何とか専門医につないだものの、クラス復帰はできませんでした。その担任の視点からすれば、自分の手を離れたということで、要するに連携という発想はありませんでした。主治医には「学校でその子を支える組織ができれば学校復帰は無理でしょう」と言われ、私は学校長にもいろいろお願いをしましたが、形になるのに時間が必要でした。結局、母親自身が学校を見切ったという形で、自主退学という手段を取りました。養護教諭が果たした役割は、専門医を受診させてその子の病理ははっきりしたものの、ラベリングしただけで、卒業も社会的自立もさせられませんでした。今でもこの事例は、連携の失敗例としての原点になっています。私は、子どもたちの理解に関して他の先生よりは先駆けて勉強していると思っていました。そうすると、養護教諭自身にその他の先生方との温度差が生まれ、なぜ自分と同じレベルで生徒を抱えてもらえないのだろうと、批判的な態度で、口ではそう言わないのですけれども、おそらく態度ににじみ出てしまったのだと思います。そうすると連携は失敗してしまうのですね。また、養護教諭として生徒の立場に立って動いてきたつもりだったのですが、保護者からすれば、養護教諭も学校の一員であり、何の支援にもならなかったわけです。やはり**学校のキーパーソンは、あくまで担任**であり、養護教諭としては、担任に生徒を抱えてもらえるようにするための黒子に徹するべきじゃないかと思いました。

その後1990年代後半から普通科と商業科のある高校に転勤しました。ここには相談部があってカウンセリ

ングを勉強した先生がおり、味方がひとり増えたなと大変心強く思いました。生徒を同じスタンスで抱えることができました。摂食障害、解離性人格障害、対人関係障害が多く、私と相談部の先生だけで対応するには手一杯でした。病理性が高いケース、家庭の問題もあるケースが多かったのでスクールカウンセラー配置の要請をし、進学校としては県内で初めて配置されました。

また高校には単位の問題があります。私たちと関係がとれて教室復帰しても、結果的に単位がとれず卒業までもっていけないとケースが多々ありました。それで**教育相談対策委員会**の設置を働きかけました。その委員会で**別室登校者の単位の問題を検討し**、今まで中途退学せざるを得なかったようなケースを何とか卒業に持ち込むことができました。その頃は、今のような不登校生徒の受け皿が十分でなかったのが、卒業させるというのが大きな目標でした。その委員会の中で、別室登校者の単位認定がなされたことは画期的なことでした。

そして現在、再び最初の学校に勤務しております。生徒指導は大事だという視点の先生がたくさんおられるし、相談部、コーディネーター、スクールカウンセラーもいます。各学年で情報交換会を実施しており、生徒の情報は交換しやすい状況です。特別支援指定校でもありますので、組織としては充実してきております。ただ、中にはカウンセリングは甘やかしだという厳しい見方の先生もいて、対応の二分化、二極化は今もあります。現職研修会に参加するのはいつも同じ職員だし、生徒理解の均質化はあと一歩と言うところです。また、連携できる人とできない人は時代を超えて歴然とあります。責任感が強く自分で抱えてしまうタイプ、内恥をさらすという感覚をもつ先生も多いようにも思います。

また昨今情報交換をしにくい状況もあります。先生方が多忙で余裕がなく、ほとんどの先生がパソコンに向かっています。私が声をかけると「びくっ」とされる。背中に「話しかけないで」のオーラが漂っていても、めげずに5分でも10分でも生徒の情報を共有したいとの思いで生徒の話をしています。「強引なのは自分の性格のせいではない。養護教諭の役割だからだ」と独り言をつぶやき、この壁を乗り越えています。

スクールカウンセラーとの連携では、非常に助かっています。養護教諭はある程度見立てをして担任に伝

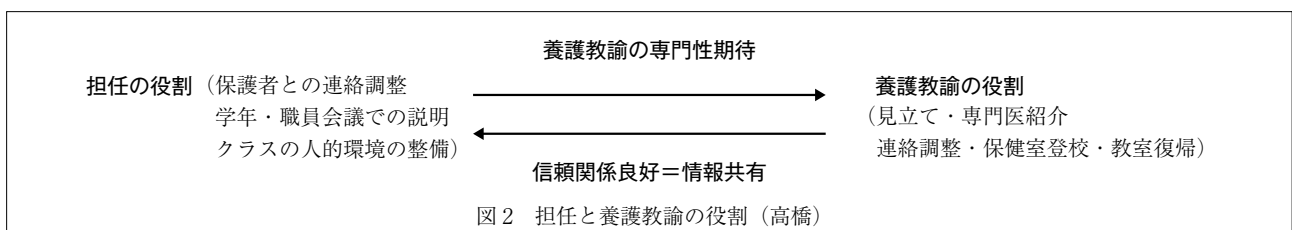
えなければなりません。その時の後ろ盾となり、安心感を与えられ、養護教諭のスーパーバイザーとして存在していると思います。また専門医の受診についてもスクールカウンセラーが説得力をもって担任に説明してくれます。

最後に今後の課題ですが、何となく学校は旧態然としたところがあります。養護教諭の職域が未だに理解されていなかったり、一人職ならではの疎外感を感じたり、先生方の評価が気になる時があります。しかし主役は生徒、養護教諭は生徒の成長・発達を支えるスタッフとして、深い溝というか深い川を越えていきたいと思っています。

**青木**：続いてスクールカウンセラーの立場から金成先生にお話をいただきます。

**金成**：スクールカウンセラーの金成と申します。誇りと迫力のある3人の先生方の話のあとで私がお話させていただくのは心苦しいと思いつながら、スクールカウンセラーの立場でお話させていただきます。

私はいま3校でスクールカウンセラーをしています。県北の公立中学校、福島大学附属中学校、附属小学校の3校です。今日はおもに公立中学校のA中学校での活動についてお話ししたいと思います。この学校での活動は主に4つのことから成ります。ひとつめは**個人面接**、生徒や保護者を対象とするものです。通常のスクールカウンセラーの活動として、思い浮かべられるのはこのあたりかと思います。これは**トラブルが起こったあとの援助**ということになります。2つめは少人数のグループワークです。コミュニケーションが得意でない生徒、別室登校の生徒などを5人ほど集めて、月2回、ゲームとか、エクササイズなどをやっています。カウンセリングをするほどは深刻でないが、配慮が必要だな、とか、私のほうで現状を把握しておきたいと感じる生徒を集めて関わっています。これは、**トラブルを未然に防ぐ予防的活動**といえます。3つめは広報活動です。スクールカウンセラーがいることを知ってもらうだけでも、それは**カウンセリングといえる**のではないかと思います。そこで「スクールカウンセラー便り」などを出して、学校に私がいる、動いているというライブ感を伝えたいと思っています。グループワークが直接的な予防活動とすれば、**広報は間接的な予防活動**といえると思います。4つめは、先生方とのコンサルテーション活動です。これはいま私がいちばん力を入れているものです。3年目の課題はこれです。



そして、コンサルテーションはこのシンポジウムの組織作りというテーマに関わるものだと思います。

続いて初年度からの活動をふりかえりながら組織作りについてお話しします。組織の中にどう位置づくかということなんですけれども、勤務の初年度は先生方との関係作りと生徒・先生方への広報活動というのが第一の仕事でした。A中学校はスクールカウンセラーの配置はその年が初めてでした。ですので、スクールカウンセラーって何をしてくれる人なのか、スクールカウンセラーに持ち込むべきケースはどういうものなのかということが子どもたちにも先生方にもあまり広がってないのではないかと考え、私を使っていた**ための広報活動**に力を入れました。具体的には、各学級の帰りの会で自己紹介させてもらうとか、空き時間は保健室で過ごして生徒と接触の時間を増やすとか、「スクールカウンセラー便り」の発行、相談室前とか保健室前に私の勤務日を表示していただくとかです。先生向けに生徒指導主事や養護教諭と業務の連絡を密にする、あるいは問題となりそうなケースがあった場合に、「私はこのケースに関してはこんな関わりができると思います」と事前に提案するなどです。そんな風にすればスクールカウンセラーと関わったことのない先生方にもスクールカウンセラーの使い方を理解していただけるかなと考えたんですね。幸い教育相談担当の生徒指導主事の先生と養護教諭の先生が「スクールカウンセラーを積極的に使おう」という考えだったので、年度当初から相談の依頼がわりと多くて、一年目の課題は達成できたかなと思います。

二年目は相談業務を拡大しようと私が努力している時期でした。というのも初年度の活動で相談件数は増えたんですけれども、先生方とのつながりというのは相談ケースのある先生、クラス担任の先生だけですね。ほとんど、それだけで終わったという感じだったんですね。一度スクールカウンセラーを利用してくれた先生は新しいケースの依頼をしてくれるんですけれども、そうじゃない先生から全く依頼が来ない、話する機会がない、接触がないという流れがあるなと思ひまして。直接子どもや保護者と話すというだけではなくて、先生方の活動の中にスクールカウンセラーの**考えや意見を取り入れてもらって**、日々意識してもらってというのも、スクールカウンセラーの仕事の一つかなと思ったんですね。それで、今まで以上に多くの先生方と接点を持ちたいと思いました。特定の先生方との関わりだけでは、スクールカウンセラー事業自体が定着しないとも考えていました。ですからなるべく気軽にカウンセリングに応じるように努力していました。「**使い勝手の良いスクールカウンセラー**」と思って欲しいという気持ちが強かったように思います。その結果、生徒指導主事の先生のおかげでほとんどの先生方と関わりを持つことができました。ただ、そうな

ると今度は先生方との情報交換の時間がなくなるくらい相談件数が増えてしまって、十分な連絡ができなかったりとか、子どものその後の経過を確認することができなかったり、カウンセリングのルールが甘くなって効果が少ない手法を取ってしまったりなどいろんな反省点が残りました。

そこで三年目の今年度は生徒指導主事の先生と相談をして、一日の**相談件数の制限を設け、先生方との情報交換の時間を確保**してもらうことにしました。そうすると、日々の生活の中で先生方と、注目点や関わりの方針に関しての意見交換や、今後の方針についても相談ができるようになりました。こうすることでスクールカウンセラーの仕事を先生方に分担していただく、スクールカウンセラーの仕事自体が組織的なものになってくると感じました。現在ほとんどのスクールカウンセラーが週一回の勤務です。**スクールカウンセラーのいない4日間を先生方に分担していただく**と、**カウンセリング活動が実質継続していること**になると思ったんですね。そうなれば子ども支援のための組織としては非常に強力になるんじゃないかなと思っています。もちろん、担任とスクールカウンセラーの役割って全く違いますし、あとは守秘義務の問題もありますから難しいところもあるんですけれども、ただ担任とスクールカウンセラーが同じ方向でそれぞれが行動するっていうことは大切じゃないかなと思っています。とはいえ、今年度になってまだ四ヶ月ですので、私の組織づくりはまだまだ発展途上です。年度当初、「今年度は月一回のケース会議を実施しよう」と生徒指導主事の先生と相談をしたんですけれども、ほぼ毎週、放課後にカウンセリングが入りますので、まだ一回も開催していません。これまでの活動を通して、学年の先生方との共通の生徒理解というのはとても大切と思っているので、これは夏休み以降に必ずやっていきたいなと思っています。

また、スクールカウンセラーは多くの学校で生徒指導委員会に所属しているのですが、私は勤務の関係で去年から生徒指導委員会には通常は出席していません。初年度は毎週出席して校内の情報も聞け、私のほうから先生方にお伝えすることもできましたが、その時はまだ一日8時間の勤務でした。昨年度(2006年度)から県のスクールカウンセラーの配置事業は拠点校方式になり、A中学校の勤務は一日6時間、年間36回になりました。生徒指導委員会に出るとカウンセリングの時間が減ることになります。委員会とカウンセリングのどっちを取った方がいいのかとか悩ましい問題がどのカウンセラーにも起きていてはいないのでしょうか。折衷案として昨年度から私が実施しているのは、委員会の記録のコピーをいただいて、生徒指導主事から補足をさせていただくという方法です。ただface to faceの情報に比べると情報量が少ないと思ひ



ますし、私からの情報発信の機会がないのは結構不便、不自由でもあります。そういうことを補う意味でも、先程話題にした、月一回のケース会議ができるというと思っています。ちなみに、福大附属中学校では“教育相談推進委員会”という組織がありまして、この会には校長先生、副校長先生、教務、各学年の担当者とスクールカウンセラー2名が月1回放課後に集まってケース会議をしています。この委員会では心理的配慮や援助が必要とされる子どもたちを対象に、関わりの経過や今後の方針について話し合っています。A中学校でもこれが一番現実的な情報共有の場かなと今思っているところです。何らかの委員会にスクールカウンセラーが所属するという事は、情報交換の場としてだけではなくて、スクールカウンセラーからの発信ということも意味するので、組織の中での活動がしやすくなるというメリットが生まれます。

今後の課題についてですが、子ども支援のための、ということにおいては、先生方とスクールカウンセラーのつながりをどう密にしていくかということが大きなポイントだと思っています。一方では、**スクールカウンセラーの独自性**とか、**外部性**も意識する必要があると思うんですが、いずれにしても学校という組織の中で、時間的な制約を考えながら行動していくということが重要と思っています。もう一つは私個人の目標というか、それも組織としての発展につながると思いますが、**相談室、スクールカウンセラーの敷居を低くしていきたい**、そのために先生方といろいろと話し合いを進めていかなきゃいけないと思っています。

**青木**：ここで佐藤理先生に指定討論者としてコメントをいただきたいと思います。

**佐藤理**：4人のシンポジストの先生方ありがとうございました。指定討論者として発言させていただきます。

小学校の大森先生からは自らの経験を通して、学校での組織作りの基本、原則について整理してお話しいただきました。先生にさらにお聞きしたいことは、特に**管理職の立場からみて、何が組織作りを阻むのか**についてお伺いしたいと思いました。

中学校の佐藤先生のお話について印象的に受け止めさせていただいたところは、機能していない、影の薄い教育相談部をいかに組織として動かしていったかということです。これについてコーディネーターの役割を意識してノウハウを具体的に出示いただきました。組織的な取り組みを機能させて活性化させていく方策として、**課題、取り組みそして成果を関係者に「見える形」にして活動を励まし盛り上げていく**という点が大変示唆に富んでるなと思いました。今日の子どもの問題の困難さ、多面性、あるいは背景の複雑さ故にますます手を携え共同した組織的な取り組みが必要になってきています。先生にお聞きしたいことは、あまりの状況のひどさにともするとバッシング的見方に

なってしまいがちですが、生徒そしてお母さんやお父さんのとる行動の中に、問題解決に向けてどんな芽が孕まれているのか教えていただけたらと思いました。

30数年に亘り養護教諭として高校に勤務している高橋先生は、学校の種類によって教師集団の姿の違い、そこで共有されている「学校文化」の違いがあるなかで、養護教諭として協働のための組織づくりと取り組みをどう進めてきたのかについてお話をされました。先生は最後のほうで「**深い川、深い溝**」があると言っているんですが、これについてももう少し具体的なことを出していただき、それをどのように越えていくのかについてお考えをお聞きしたいと思いました。

金成先生は、今携わっているスクールカウンセラーの仕事について紹介され、スクールカウンセラーとしてどういうことを考えながら学校の中で活動しているのかをお話しいただきました。私の個人的な関心として先生にもう少しお聞きしたいことは、子どもの問題への組織的な取り組みの出発点に据えられる、その問題をどう見るかについてです。**学校の先生とスクールカウンセラーの問題の見え方の共通点と相違点**です。どのように共通なのか、あるいはどのようにずれるのか、それぞれどんな特徴があるのかについてです。また違っている場合にどうしているのかについてもお聞きできたらと思いました。以上です。

**大森**：大変な問題を提起していただきました。私はいろいろあると思うんですが、強いて三つ挙げてみます。一つは、他の先生方の発表の中にも十分感じ取られたことなんですが、いろんな委員会があるんだけど、それとの、例えば校内委員会だったら、それと各種委員会との整合性、あるいは時間調整、それをどうするかということが非常に難しいなと思います。NHKの「クローズアップ現代」で新採の先生方のことが取り上げられていました。新採の先生のところ子どもたちが虫を持ってきて傍に来るんだけど「今、会議だから」って言って、子どもらのそれに応えられない。だけれども、その先生は応えてあげたいと悩む、そういう内容でした。学校にいと打ち合わせあり、職員会議あり、生徒指導委員会あり、現職研修があり、専門委員会があり、学年会があり、教科部会があり、その他もろもろ。その中でいかに時間を作るかということ、大変なことだなと思います。それで、私は先生方と話し合いました。県教委では何年前に適正化プログラム、できるだけ行事を精選なさい、それから効率よく会議進めなさいという通達が出ています。ところが、なかなかそれが守られていないというのが現実でないのかな。ですから先生たちと話したのは、「校内委員会のところと生徒指導委員会のところの元になることは、子どもを良くするためにどうするかということが共通していることなんで、一緒にやりましょう」というようにして少しでも委員会



とか会議とかといったものを精選する、あるいは一緒にやる。このような形でできるだけ先生方に負担をかけないように心がけて取り組んでまいりました。

それから、二番目に難しいのは、子どもをどう見るか、児童・生徒観の問題。30歳の先生は30年間、自分の生き方を、40歳の先生は40年間、自分の生き方をしてきたわけです。それぞれの先生方が、それぞれの哲学を持っていらっしゃる。その先生の考えをすぐに変えることはできるはずがない。ですから、そういう児童観・生徒観をみんなで話し合う場、あるいはそれに刺激を与える、「子どもにとってどうなの?」とか、「子どもは今いる父ちゃんとか母ちゃんとか必ず死んでしまうんだよね?一人で生きていかなきゃなんないんだよね?つまり、子どもたちはやがては独り立ちをしなければならない存在だ。だとすれば教師として、あるいは養護教諭として、私たちはその大人になる旅をしている子どもたちの先輩としてどうしてあげることが大切なんだろうね」。そのようにして先生方に投げかけて、見る目が少しでも変わってくれば、あるいは見る目を広げてくれればと願っていました。

三番目はこれは私からはなかなか言いにくいんですが、金成先生のお話の中に敷居を低くするというお話ありましたが、管理職が、つまり校長が校長室の敷居をいかに低くするかということだと思います。子どもが入ってきやすい、(フロアに向かって)何だかちょこっとにやっとして先生いますが、先生が入ってきやすいように、です。校長の意識が校内に及ぼす影響っていうのは非常に大きいと、退職して三年目、しみじみと考えさせられている今日この頃でございます。以上です。

佐藤江：いろいろ問題が起きて、「ああ、あそこの家はああいう親だから」って、よく先生方も言います。親を変えるなんて、なかなか私たちの力ではできないわけで、しかし、そのまま放っておけない。目の前の子どもたちはその家庭で育てられているわけですから、親の考えとか、今までの育ちの問題が関わってくると思うんですね。だからといって担任がストレートに出て行くと、担任が批判され、槍玉にあがる、というふうに、あまり良い展開にはなりません。こういうケースについては目の前の子どものことを考えて、ちょっと落ち着いて、生徒指導とも連携をしながら、何がどう問題なのかを整理しないとイケないかなと思っています。“問題の”親さんたちは、今突然に問題になったわけではなくて、ずっとそういう風な形でいらしてる。小学校でも同じように捉えられていたり、地域でも「あそこの家はダメだがんね」っていうような感じで見られている。それを一学校が入って行って何とかしましようっていうのは、わずか三年間の中でできるわけがありません。

で、できるところからということで、まず専門家チー

ムの御意見を聞くことです。それからそういう親御さんに対しては学校に呼びつけたりする指導・支援は絶対上手くないかないんですね。こちらから出向く。その時に誰が行けばいいのか。私は学年主任だったので、「学年主任行け」ってこう言われるわけですが、相性っていうのがあると思うんです。この親にはこの先生が言いやすい。そういうのありますよね?たとえば保健の先生に言いやすいとか。子どもの事をよく見てくれるっていうふうに、子どもから伝わってるからだと思うんですね。そういう先生にお願いして窓口を開けておいてもらって、少しずつ少しずつ手を入れていくっていう風だったと思います。ただ、なかなかやっぱり親さんをどうするかは、大変難しい問題です。

青木：まさに、それがコーディネートするということですよ。では、高橋先生には、“深い川”をどうやって越えるのかを現時点でお考えがあればということですが。

高橋先生：抽象的に逃げたいところだったので、深い川と表現しました。高校はいろんな専門職がいるところなんですね。圧倒的に男の先生達が多い社会の中で、養護教諭としてその職種間の差別に近いものや、生徒を見る見方・価値観の違いを感じるものが間々あります。大きく言えば職員や生徒に対する強者・弱者、優劣という見方に憤りを感じる場合があります。そういったところを、深い川という表現で逃げたんですけれども。どう改善していくのか、どう越えていくのか。残念ながら養護教諭として「出すぎると打たれる」経験もしています。職員会議で「あの生徒を救って欲しい」と発言しても、賛同を得られない場合があります。しかるべき人が同じ話をすれば賛同してもらえるのかという、そういうところでも悩みの深い職種だと思っております。先程、佐藤江里子先生がリーダー的な存在の先生と出会ったとおっしゃいましたが、そういう方もいらっしゃれば、存在感を認められない養護教諭もいます。悩ましい仕事だと思いつつながら32年が経ってしまいました。これから養護教諭としてやっていく先生方に良い提案はないのですが、常々考えていることは、やはり「小さなところからコツコツと」、手を取り合える人からやっていくしかないなど。深い溝を何とかしなくてはと思っても、さらに溝が深まってしまう場合もあります。先程相性という話も出てきました。どうしても相性が悪い場合は私も回避します。そのことが生徒の進路に影響してしまうのは大変申し訳ないことです。そういう時は、できるだけ黒子以上の黒子になって、誰が一番言えばこれは上手いくのかなと悩んで、陰ながら見守っている場合もあります。その点において、教育相談のコーディネーターやスクールカウンセラーの存在は助かっております。スクールカウンセラーは一週間に1回しか来ないので、私の所で整理をし、優先順位をつけながら相性を考え

て面談していただいています。子ども中心に担任をキーパーソンとして立てながらやっていかななくちゃならないなと思っています。そして、「養護教諭と連携して良かった」との成功事例を積み上げて連携の輪を広げていくことが大切なのかと思います。

**金成:**担任とスクールカウンセラーの子どもの見方は、基本的にそんなに変わらないと思っています。ただ、やっぱり担任の先生より養護教諭の先生のほうが、スクールカウンセラーと見方が似ているなどは思いますが。

担任の先生とお子さんの相性はありますね。私から見たら「大した問題じゃないんじゃない？」っていう子どものからかいに先生がむきになったりっていうのもあって、相性という問題は大きいなと思っています。それから子どもの問題について先生方と話す時、「母子分離不安だと思うんです」っておっしゃる先生多いです。特に男の先生にそういう見方する方が多いかな。そういうとき「根底にはそういう問題あるのかもしれないけれど、それほど簡単な話じゃないと思いますよ」とお伝えします。母子分離とレッテルをはるよりは今できる具体的な手立てについて考えていくとか、なるべく漠然とした話をしないようにと思っています。先生方とスクールカウンセラーの関わり方の違いでは、先生方は案外プライベートなことに食い込まないなと感じています。家族歴や、子どもの通院した病院名を聞いていなかったりとかが結構多い。これらは子どもの援助に役立つ情報だと思いますが、先生方は少し引き気味のように思います。プライベートなことに担任が関わること、つつこむことは御法度なのかなとも思うんですけれども、もうちょい踏み込んだほうが最終的にその子どものためになるのであれば、聞いたほうがいいのになと思うこともあります。あと、カウンセラーはしつこい性格だと思うんですけれども、先生は積極的に親とか子どもに働きかけるんだけど、案外引き際も早いですね。

でも、やっぱりいずれにしても**チームプレイ**というのがすごく大切なことではないかと思っています。相性というものがあると仮定しますと、「この人でだめならこっちにいく」とか「この攻め方だめだったらこっちでいく」というふうなチームプレイの体制を整えていくことも必要かなと思います。

**青木:**時間をオーバーしてしまいました。興味深い視点を拾い出すと、先程から出ていた相性という問題。「相性などない」と前提するのではなく、むしろ「相性ってあるでしょう」から始めてもいいのではと思います。あるいは高橋先生の話には、男性文化と女性文化の問題が、金成先生のお話にはカウンセラー文化と教師文化の問題がうかがえ、佐藤江里子先生は生徒指導文化と教育相談文化の深い溝を越えられた、あるいは引き裂かれた状況になっておられる。そして、そうした組織の中の様々な対立や矛盾を大森先生はどう考えてこ

られたのか、それもぜひ深めたいと思いました。図らずもこのシンポジウムのキーワードは結果的に「溝と相性」だったかなと思います。溝があることをまず認識し、できることからコツコツと、「私には何ができる。私とこの先生が手つないだら何ができる」と考えて地道な努力をしていくということが遠回りのようで手堅いのではないかと。研修会に来てくださる方が学校に帰ってから「良い話聞いたぞ」、「来年あなたも行ったら」というふうに勧めていただく。そういうこともよい組織作りにつながっていくと思います。今私が話しましたことをまとめて代えて、このシンポジウムを閉じたいと思います。どうもありがとうございました。

### 3. まとめにかえて

小学校元校長、中学校生徒指導主事・教育相談部経験者、高校養護教諭、中学校スクールカウンセラーという3つの校種、4つの職種にまたがる話題提供者を迎えて学校の組織について議論を行った。職種や機能の違いから経験される「溝」はあるものの、それを超えていくための工夫や心構え、実践について充実した議論ができた。組織のハード面に関していえば、複数の組織を精選して交通整理することで教員の過重負担を減らした実効性のある組織へと活性化することができるという視点が示された。組織を構成する「人」についていえば、互いに話す、意見を交わす、情報を交換するということが大切というのが、4人のシンポジストの共通する主張であった。

またシンポジストそれぞれに、子ども、保護者、同僚との関わりの体験をもとにそれを自身のなかで整理し、体系化し、次の実践に生かすという態度でも共通していた。シンポジウム、ならびにこうして紙面で公開することで、それらの実践が参加者、読者の実践へとつながる機会となりえるのではないかとも思う。

90分の時間に詰め込むには豊富すぎる内容であり、フロアの質疑とそれに基づくシンポジスト同士の議論に時間をとることができなかった点は、企画者としての反省点である。また機会をあらためて、本シンポジウムの議論を深めてみたいと考えている。

(この項、文責 青木真理)

註

- 1) 河村茂雄が開発した「楽しい学校生活を送るためのアンケートQ-U」。河村茂雄他編『Q-Uによる学級経営スーパーバイズガイド』図書文化 2004 に詳しい。

謝辞 シンポジウムのテープ起しは大学院生の佐藤智子さんの協力のもと行われた。